園の人に向けた、
園のためのマガジン

園人 ENZINE

Volume
14
Spring
2025

特集インタビュー

社会福祉法人
めぐみこども園
福井県福井市

園長
中戸華恵 先生

一人ひとりの物語を、みんなでつくる。

自然豊かで多彩な遊びができる園庭、
木育ルームや地域に開かれた「こども図書館」など
魅力いっぱいのめぐみこども園。
充実した環境に目を奪われがちだが、
真の魅力は「人と人とのつながり」にある。
子どもも大人も幸せに過ごせる園は
どう創られているのか。その秘密に迫る。

選び抜かれた「ホンモノ」が揃い、
好奇心が刺激される
圧倒的な環境!
大人も思わず童心に帰って
遊びたくなってしまいます!

let's check

先生が輝く!
めぐみこども園の共主体の環境

めぐみこども園の働きやすい環境づくり。
みなさんはどんな工夫をしていますか?

自分の得意を生かして、いろいろなことに挑戦できる。

「まずはやってみる!」を大切にしている園です。子どもの声を拾いながら、新しいことにも挑戦!自分の個性を生かした保育を楽しんでいます!

4歳児担任 藤田美咲先生

職員同士で子どもの姿をたくさん語り合っている。

クラス担任同士は毎日、それ以外の先生とも頻繁に対話する機会があります。おかげでチームワークは抜群!些細なことも相談しやすいです。

5歳児担任 村上侑菜先生

地域資源もフル活用し、遊びを広げ深めている。

園外に積極的に出かけたり、色々な方を招いたり、多様な体験を大切にする園なので、遊びの展開を考える際の選択肢が多く、ワクワクします!

3歳児担任 齋藤京花先先生

産休・育休の取得者多数!多様な働き方ができる。

育休から復帰し、今は時短で働いています。育児をしながら働く先生も多く、お互い助け合える環境です。職員の平均勤続年数はなんと14年です!

4歳児担任 藤田美咲先生

配置基準よりも手厚い職員数。

以上児の担任は各学年4名と数が多いので、余裕をもって子どもと関わることができています。1年目から保育を楽しむことができました。

5歳児担任 村上侑菜先生

2025年
8月28日(木)

社会福祉法人
めぐみこども園 福井

現地とオンライン同時開催!

助言者は
大豆生田先生!

WEB
お申し込み
こちらから▶

詳しい内容は同封のチラシをご覧ください!

特集
インタビュー

社会福祉法人
福井県福井市

めぐみこども園

園長
中戸 華恵 先生

一人ひとりの物語を、みんなでつくる。

子どもの心が動く瞬間に寄り添い、世界をひらく。

ワクワクしてリラックスできて、ずっといたくなる。それがめぐみこども園の第一印象だ。園舎に一歩足を踏み入れると木のぬくもりに包まれた空間に、子どもたちの作品や保育ドキュメンテーションが所狭しと並ぶ。廊下には海の生き物の水槽やライトテーブルやカラフルな積み木。保育室にはさまざまな遊びのエリアがあり、子どもたちの探究と想像の世界が広がっている。園庭には築山やビオトープ、木のテラスやアトリエ。どの場所も保育者の意図のもとで細やかな環境構成が行われており、子どもたちは、それぞれ安心できる居場所を選んで過ごす。

めぐみこども園では、保育者主導の一方的な管理や制限を行わない。一人ひとりの生活リズムが尊重されており、子どもたちは自分のタイミングで遊びを終わらせ、お腹が空いた子から給食を食べ、眠くなった子からお昼寝をする。

3歳児の保育室を覗いてみるとキャンプ・相撲・美容院・パン屋さんなど遊びのブームごとに空間がゆるやかに分かれている。各エリアには遊びの跡や子どものつぶやきの記録、テーマにまつわる写真などが掲示されており、探究の過程が伝わってくる。相撲コーナーでは子どもたちが相撲をとって遊んでいる。めぐみこども園では「本物に触れる」ことも保育の大事な柱。先日、子どもたちはなんと本物の土俵を見に行った。「3歳児の担任から『子どもたちの相撲愛がすごいので、本物の相撲を見せたい』という相談があったんです（笑）」と語るのは園長の中戸華恵先生だ。担任とアイデアを出しながら色々なところに掛け合い、近くの高校の相撲部が協力してくれることになった。「お相撲体験をした子どもたちの頭の中は『どうしたら強くなれるの？』『何を食べたら大きくなるの？』というハテナがいっぱい。その子どものハテナを、担任がワクワクしながら拾ってくれています。本物を見た後の展開も、とても楽しみです」と中戸先生は微笑む。

子どもの「知りたい！やってみたい！」に寄り添い、支援するのがめぐみこども園の保育者の役割。子どもたちは毎日いろいろなものや人と出会い世界を広げ、保育者もまた子どもと共に成長している。

大切な伝統行事を変えたら、保育が動き出した。

子どもの思いから始まる遊びを大切にしている同園だが、3年前までは「保育者主導の一斉活動」が中心だった。保育計画は固定的で持ち帰り仕事も常態化しており、今日の子どもの姿を明日につなげるような対話も少なかったという。保育者の表情がとくに曇っていたのが、夏祭りの「和太鼓演奏」だ。ただ中戸先生は「練習の大変さは感じていましたが、長年大切にしてきた伝統行事ですし、保護者も喜んでいたので、変えようとは思っていませんでした」と当時を振り返る。

ところがある日、他園の視察に行った中戸先生はそこで目にした風景に衝撃を受けた。「環境も素晴らしかったのですが、とにかく子どもたちの表情がキラキラしていて。こんな園にしたい！と心から思いました」。子どもたちが夢中になって遊べる環境を作りたい、と主幹に相談したところ「まずは和太鼓を変えたい」と言われた。他の保育者にも話を聞くと、「行事ではなく遊びのコーナーにして、誰でも自由に楽しめる形に変えるのはどうか」

「和太鼓の練習がなくなれば他の遊びを深められるのでは」など次々とアイデアが出てきた。中戸先生は何よりも保育者たちが思いを語るその表情に心を動かされ、保育を変える決断をした。そこから5歳児が立派に演奏してきた和太鼓は、コーナー遊びの一つに形を変え、やりたい子が楽しみながら演奏する行事になった。そのほか少しずつ子どものつぶやきを取り入れた遊びの環境が生まれ始め、保育者たちの笑顔も増えた。

ドキュメンテーションがあることで、子どもも大人も「今日」を振り返ることができる。

保育が「子ども主体」へとさらに大きく動き出したきっかけが、ドキュメンテーションへの取り組みだ。子どもの姿を可視化することで対話が生まれ始め、保育をもっと丁寧に振り返って環境に反映させたい、という思いから働き方改革も始まった。子どもの声を直接聞くためにサークルタイムを始めたら、遊びが明日につながるようになった。こうやって「つながる・深まる・広がる」保育が循環し始めた。

「対話」は「聴く」ことから生まれる。

劇的なスピードで保育が変わり始めためぐみこども園。年齢や経験に関わらず、全職員が一丸となって保育改革を推し進めてきた。中戸先生が何よりも大切にしているのが「一人ひとりの声を『聴く』語り合い」だ。「園の思いや方針をしっかり伝える必要はありますが、一方的な伝え方ではうまくいかないこともありました」と中戸先生。相手の思いを聴き、尊重し、同じ気持ちになれることが重要だと気づき、そこから一人ひとりの良さが生かされる対話の風土作りに取り組んだ。

新しいことに挑戦する際には、グループで何度も語り合う。若手保育者の意見も反映できるよう、若手同士の対話のグループや先輩保育者が話を聞く場も作った。毎日の振り返りの時間には、非常勤も含めて全員が話し合いに参加。園全体でビジョンを共有し、課題解決に取り組む。

自分の言葉を丁寧に聞いてもらうことで、自然と保育者の主体性が育まれ、保育や子どもに対する意識も変化していく。これが対話の価値だ。「語り合いを通して誰も想像しなかったような視点に出会うことができます。うまくいったかどうかは結果でしかなく、自分たちが対話を通してたくさん考え、いろいろな物を作り出してきたそのプロセスこそが重要です。失敗して初めて見えるものもありますし、『課題』も見方を変えれば『伸びしろ』。保育者が自分らしく笑顔でいるためにも自信を持って仕事に向き合うためにも、オープンな対話の場は不可欠です」と中戸先生。めぐみこども園では、日々の小さな対話がみんなのエネルギーの源になっている。

子どもを真ん中に、「ウェルビーイング」の循環を作る。

子どもの遊びが変わり、先生の姿も変わった。そのワクワクの輪は今、保護者や地域にも広がっている。保護者に毎日配信しているドキュメンテーションでは、子どもの心が動いた瞬間や保育者が感じたうれしい発見を素直に表現することを大切にし、保護者参加型の行事や園庭ワークショップなどの場では、保護者と直接語り合う。「以前は木育ルームなどの施設に魅力を感じて入園を希望される方が多かったのですが、最近は『子どもの気持ちを大切にしてくれるから、この園に通わせたい』という声が増えています。乳幼児期の子どもの素晴らしさをみんなで分かち合えることを、とてもうれしく思っています」と中戸先生。保育が未来をつくる大切な仕事であることを伝えるべく、地域を巻き込んだイベントの開催や学生ボランティアの受け入れなどにも積極的に取り組む。

近年、保育の文脈でも大切にされ始めた「ウェルビーイング（心も身体も良い状態にあること）」。その本質は、一人ひとりの気持ちや行動に関心を寄せる「日常づくり」にある。今の中戸先生の目標は、園をみんなの「心の安全基地」となるような居場所にすることだ。「目の前の一人に丁寧に寄り添うことでその人が園を居心地よく思い、周囲の人が自然と巻き込まれて、ウェルビーイングな関係性が広がっていく。そんな園にしていきたい」と語る中戸先生。子どもを真ん中にみんなの気持ちがつながる園を作るために、めぐみこども園はこれからも「深化」し続ける。

文／大澤香織（スマートエデュケーション）
写真／田中仁志
デザイン／スマートエデュケーション

Special Thanks
Kyoka Saitou
Kaori Makino
Sayaka Kojima
Yuna Murakami
Misaki Fujita

ココがポイント!

1

子どもたちの探究心をくすぐる園庭

2

一人ひとりが居心地よくいられる室内環境

3

地域を巻き込んだコミュニティづくり

めぐみこども園のココがすごい！

いろいろな人のいろいろなアイデアや願いが詰まった環境！

子どもの姿をベースにどんどん変化するのも大きな特徴です。

Ennai Shōkai
保育環境

屋内環境

対話が生まれる「共主体」の屋内環境

主幹教諭 牧野香先生

屋内環境を構成するうえでは「子どもたちがやってみたい遊びが展開できる」ことを最も重視しています。ただ、大人の都合で「遊びや学びを豊かにしたい！」「遊びをつなげたい！」と思ってしまうと、情報量が多いだけの場になってしまいます。園は子どもたちの生活の場。疲れた時にそっと心を落ち着けられる場所づくりも大切にしています。

この園には子どもたちの居場所がたくさんあります。以前はクラス全員が一つの場所で過ごすことが当たり前でしたが、子ども主体の保育に取り組み始めてからは子どもたちが過ごしたい場所で過ごしています。まだ話せない乳児であっても大人であっても、みんなが自分らしくいられて、お互いに思いを伝え合うことができる。そんな豊かな対話を生み出すことができるのが「共主体」の環境だと思います。

環境はクラス担任だけではなく、いろいろな人が関わりながら整えています。つい最近、0歳児の部屋をリニューアルしました。遊びも食事もお昼寝も同じ空間で行うことが「子ども主体」という理念に合っていないと感じ、環境を再構成。設計士の指導のもと保育者と保護者が一緒になってロフトや滑り台を手作りしました。使わない家具を再利用したり、みんなでアイデアを出したりしながら作るのが、とても楽しかったです。

子どもたちの主体的な遊びに寄り添い、支えていくにあたっては保育の専門性がとても重要です。子どもとどう関わるのか、どう環境を豊かにしていくのか、ワクワクする心と学び続ける姿勢を忘れずにいたいと思っています。

「東京おもちゃ美術館」監修の木育ルームには質の高い木のおもちゃがたくさん！
このほか廊下や保育室など園のあらゆる場所を木質化し、居心地の良い空間を作り出している。

廊下も大切な遊びの空間。生き物に触れる水槽やライトテーブル、
そしてなんと遊び専用の冷蔵庫まで！歩きながら、ついつい寄り道したくなってしまう。

上ったり降りたり隠れたり。1人でじっと集中したり、お友達とくつろいだり。
子どもたちの表情を見ていると、いかに子どもの姿に寄り添って保育環境が作られているかがわかる。

園庭環境

園庭をすべてのことができる場所に

主幹教諭 小嶋紗矢香先生

保育改革が進み室内遊びが充実していくなか「園庭環境も再構成したい」という思いが職員の間で広がり、園庭プロジェクトが発足しました。ASOBIO※との出会いをきっかけに、2022年7月から本格的な園庭改革がスタート。まずは倉橋惣三先生の「最高の教育の場としての園庭」についてみんなで学び、「園庭をすべてのことができる場所に」というビジョンを明確にしました。研修では対話を大切にし、自分たちが幼少期に好きだった遊びを振り返り、一人ひとりの思いを具体化しながら、少しずつ園庭プランを形にしていきました。もちろん子どもたちとも「どんな園庭にしたいか」を話し合い、アイデアを取り入れました。

2024年5月にベースとなる園庭が完成。でこぼこの園庭で子どもたちはいろいろな動きに挑戦したり、水遊びを楽しんだりしています。ビオトープではいろいろな生き物に触れ、命の尊さを感じたり、アトリエやテラスで絵本を読んだり造形遊びをしたり。屋内・屋外で遊びが切り分けられることなく、文字通りすべてのことができる園庭となりました。

子どもたちの遊びの変化を保護者にドキュメンテーションで共有したり、保護者参加型のワークショップを実施したりするなかで、保護者の意識も大きく変わりました。怪我や汚れへの理解も深まり、子どもたちが思い切り遊べる環境づくりをサポートしてくださっています。私たちが大切にしているのは環境の可変性や可塑性。今後も子どもたちの「夢中」を作るため、保護者や地域の方を巻き込みながら、園庭環境をさらに充実させていきたいと思っています。

※スマートエデュケーションによる園庭環境の研修・設計・施工事業。自然と人の「共主体」の園庭づくりを支援。

手前は地域のJAの方の協力のもとで作った田んぼ。いろいろな分野の専門家に学びながら、
生き物とのつながり・収穫・食べ比べ・わら細工作りまで、たくさんの遊びが生まれた。

職員間で常に子どもの姿を共有し、安心して挑戦できる環境、命の尊さに触れられる環境を整備している。
子どもが好きな場所で過ごすことで、異年齢児の関わりも盛んに。

園庭のアトリエ棟。自然素材を使った造形遊びやピザ・ジャムづくりなど、
やりたいことに自由に取り組める環境。プロジェクターも完備され、驚きや発見をすぐに共有できる。

地域とのつながり

園を真ん中にした「まちづくり」へ。

園を地域に開く取り組みを積極的に行うめぐみこども園。2022年には子育て応援プロジェクト「はぐらぼ」を始動。園外の人も利用できる「こども図書館」では、子どもの本の専門店「クレヨンハウス」に選書を依頼し、5,000冊以上の良質な本を貸し出す。そのほか木育ルームでの一時預かりなど、未就園児・卒園児とその保護者、地域の人々が気軽に訪れ、リラックスできる居場所を提供している。

2024年にリニューアルされた園庭は「めぐみVILLAGE」と名づけられ、月に一度「こどもまんなかデー」というイベントを開催。地域の子どもたちを中心に多様な人々が集い、ワークショップやマルシェなどのイベントを楽しんでいる。

もう一つ大切にしているのは、学生たちのつながりだ。めぐみこども園では、夏祭りや豆まき、スポーツフェスティバルなど、多くの行事、イベントに高校生・大学生のボランティアが関わっているほか、小・中学生との日常的な交流の場も設けている。優しく遊んでくれるお兄さんお姉さんたちは園児にとって憧れの存在。保育者とは異なる立場で遊びを豊かにしてくれる。学生たちにとっても、園児との関わりは子どもの面白さ、保育の面白さを知る貴重な機会だ。ボランティアとして関わった学生が、保育士として園に就職してくれるケースも多く、採用にもしっかりとつながっているという。

地域を巻き込み地域との絆を深めることで、みんなが安心できる「まちづくり」に挑戦しているめぐみこども園。園長の中戸先生は、地域への思いについて次のように語る。「地域とのつながりを深めながら育った子どもたちは、大人になったときにもその地域の文化や自然、身の回りの人々を大切にしてくれると思います。子どもたちを真ん中に人々が自由に集い、支え合う環境を築き、地域全体で育ち合う場を作っていくのが今の目標です。さまざまな取り組みのなかで、みんなが地元を愛する気持ちが育まれ、まちが豊かになっていくとうれしいなと思います」

スタイリッシュかつ木のぬくもりを感じる「子ども図書館」。オリジナルアプリを開発することで、入退室や貸し出しは無人管理。安全性と利用の手軽さを両立している。

近くのお店に出かけて仕事を見せてもらったり、園庭を保護者と一緒に改造したり。多様な出会いや経験を通して、大人と子どもが共に育ち合う。

「子どもの道具」としてのICT

Ennai Shōkai
新しい挑戦

ICTを取り入れたワクワクする保育

めぐみこども園では以前から保育を共有するためにプロジェクターを活用したり、PCでドキュメンテーションを作成したりするなど、保育者の道具としてICTを活用してきた。3年前からは保育室にモニターを設置。保育者がタブレットで子どもの姿を撮影し、サークルタイムなどで子どもたちと共に遊びを振り返るなどの取り組みも始めた。保育者がタブレットを活用するようになってからは、子どもと一緒に写真を撮ったり、アプリを使って音遊びや製作遊びをしたりするなど、ICTの用途が「大人の道具」から「子どもたちの遊びや学びを広げる道具」へと少しずつ広がっていった。その後、子ども主体の保育が充実するなかでタブレット、電子顕微鏡、ライトテーブルなどを子どもが自由に使える環境を整備。子どもたちが自ら興味をもって植物や生き物を観察したり、光や色遊びをしたりする姿が見られるようになったという。

ICTが手軽に使えるようになった一方で、子どもたちの使い方についての悩みも生まれた。しかし、サークルタイムで子どもたちと直接話し合ったり、保育者同士での対話や研修を重ねたりするなかで「大人の価値観で一方的にICTを制限するのではなく、タブレットの存在が埋もれるくらい周囲の環境を豊かにすることが何よりも大切」だと気づいたという。

昨年は子どもたちが沖縄の伝統舞踊「エイサー」に興味を持ったことから、沖縄の園とオンラインで交流。プレゼントを送り合い、お互いの地域の郷土料理をオンラインでつなぎながら一緒にクッキングするなど、アナログ体験も大切にしながら交流を楽しんだ。

「ICTはすでに子どもたちの生活に入り込んでいます。だからこそ豊かな体験とのつながりやお友達との協同的な遊びのなかでのクリエイティブなICT体験を子どもたちに味わってほしいと考えています」と小嶋先生。一方で便利な道具だからこそ「本当に今それが必要か？」と立ち止まって考え、別の体験を提供することも重要だ、と語る。デジタルもアナログもフラットな視点でとらえて、子どもの選択肢を増やす。固定観念にとらわれない挑戦が、ワクワクを作る保育の土台となっている。

3歳児以上が毎日行っているサークルタイム。モニターで写真を共有することで、子どもたちは実感を持って話ができ、お友達の思いもイメージしやすくなる。

保育室にはプロジェクターコーナーや電子顕微鏡コーナーも。ただ置くのではなく、遊びのテーマに応じてセッティング。豊かなアナログ環境の中でICTが「道具」としてなじんでいる。

沖縄の園とのオンライン交流の様子。「ここが違うね」もあれば「ここが一緒だね」もたくさん発見！遠くの地が「自分ごと」になる貴重な体験となった。